

H23 全学教授会での定年退職教員の挨拶メモ（2012.3.21_東工大蔵前会館くらまえホール）

慣例により送別懇談会発起人代表である広瀬茂久が司会を務めた。学長の挨拶に引き続き、定年退職教員から挨拶があった。時間の都合でお一人 3~4 分と短いスピーチだったが、定年を迎えられる先生方の万感胸に迫る思いがひしひしと伝わってきた。東工大をこよなく愛された気持ちも言葉の端々に溢れていた。「定年の本当の意味は 4 月 1 日になってからでないとわかりません」という大先輩である学長の言葉も心に残った。定年は思った以上に大きな出来事で、恋愛なみに私たちの心を揺り動かすようだ。

27 名の定年退職教員のうち 13 名の方々にご出席いただいた。多忙な教員生活を反映して半数の先生方のご都合がつかなかったのは残念だった。以下に先生方の挨拶を簡単にまとめさせていただく。司会のかたわら取ったメモなので聞き違いや勘違いもあるかも知れない。意をくんでいただければ幸いです。

細谷暁夫（基礎物理学専攻）



基礎に凝り固まった物理学者だったが、H2 年に東工大に来て以来の工学系の先生方との付き合いを通して、工学が単なる基礎の応用ではなく、人間の大切な営みであることを知った。このように視野を広げてもらったことに感謝している。東工大の学生と事務職員は優秀だが教員は並かも知れない。

高柳邦夫（物性物理学専攻）



本学の先輩が築いた物理学の土壌の上に学士院賞の花を咲かすことができたのはこの上ない喜びだ。仕事の間を提供してもらい、ご支援いただいた方々に感謝したい。総理工に「創造専攻」をつくることに関わられたのは幸せだった。紀元前 100 年頃の哲人の思索が今に通じることには心動かされる。「考え抜こう！東工大」とエールを送りたい。

榎 敏明（化学専攻）



一時大学を離れていたもので、東工大に着任した時は新鮮な目で大学を見ることができた。大学の変化に驚いたが、その驚きは今も加速気味に続いている。垣根の低さと好きなことができるのが東工大の良さだ。偉い先生が大型研究費を取り続けて若者を圧迫するという老害は避けたい。

谷岡明彦（有機・高分子物質専攻）



学生時代から 40 年以上東工大の自由な雰囲気を楽しんだ。東工大は個人商店の連合体のようなものだ。大学の今後の経営戦略を練るうえでこの観点を忘れないでほしい。繊維工学科からのスタートで産業構造変化の荒波にさらされ続けた。この経験から、いざという時は Quantum leap（修正ではなく革新）でしか生き延びられないことを学んだ。

酒井義則（集積システム専攻）



NTT から東工大に来て 24 年になる。先祖代々、東工大の家系で 4 代目になるが、学長が決まらない今の状態は先祖に叱られそうだ。4 月から放送大学渋谷センターの所長として、もうしばらく社会とかかわれるのは恵まれており感謝したい。

青木義次（建築学専攻）



本人は真面目で常識的と思っているが周りからは変人とみなされている。小学校の時に正しい答えを丸で囲みなさいといわれ、小さな丸を数珠のようにつなげて正しい番号を囲み、先生をたまげさせたことに始まるようだ（よく考えると青木少年のやり方が正しい）。できない学生を教えるのが好きだった。最近の学生は皆スマートになってきたので丁度やめ頃と思う。

原科幸彦（環境理工学創造専攻）



あこがれの大学に入り、そこで仕事できたのは幸せだった。建築学科から新しくできた社会工学科にもぐりこみ、環境との関わりを深めることになる現代社会に、専門の立場から提言できたことに満足感もある。学長選考等の大学のマネジメントに関しては今後に大いに期待したい。自由な学風を大切にしてほしい。

小島政和（数理・計算科学専攻）



37年前に慶応大学から東工大に来たときは、私立に比べ、面倒を見るべき学生が少なく恵まれていると思った。まだ学生服を着た学生もいた。古き良き時代だったのかもしれない。最近はやわしくなって落ち着かない。時代が変わっても普遍的なもの それは時間だ。若手への最高の贈り物は時間（ゆとり）だ。

森 欣司（計算工学専攻）



15年前に企業から来て、文化の違いに驚いた。元気のいい学生に恵まれ充実していた。そのうちの7人がベンチャーを立ち上げている。最近では、この3月に修了というM2の学生が卒業直前の1月にベンチャーに専念したいと退学してしまったほどだ。日本の技術力が弱くなってしまっているのではないかと心配されている。この憂いを東工大の力で払拭してほしい。

宇治橋 貞幸（情報環境学専攻）



学生時代から47年間東工大で過ごした。3月3日の入試の時に雪が降ったのを覚えている。受験番号も。大学紛争で卒業式がなかった。学生時代は陸上部で、教員になってからは顧問を務めた。箱根駅伝出場を夢見たがかなわなかった。教務関係の役職についていた時の学生との団交が忘れられない。西8、9号館を建てるには学生の部室を取り壊し別の場所に移す必要があったが、そう簡単な話ではなかった。これを何とかまとめることができ、大学にとっても学生にとってもいい仕事できた。

二ノ方 壽（原子炉工学研究所）



動燃時代、東工大時代を通して、高速増殖炉の冷却材Naのコンピュータシミュレーション一筋で、満足な研究生活だった。昨年は原発事故対応で、超多忙となり疲れ切ってしまった

た時期もあった。東電に関わった時期もあり、自分の昔の勤務先が悲惨な事故を起こしてしまった事実は、重く心にのしかかったままだ。広い視野で原子力を見る必要性を痛感している。4月からはミラノ工大で教鞭をとる。

赤池敏宏（フロンティア研究機構，生体分子機能工学専攻）



22年前に農工大から疾風怒濤の如く東工大にやってきて、そのままの勢いで、学際化を掲げて仕事をした。教育も研究も好きなので大学は職場として理想的だった。学生時代には安田講堂前でビラまきをした。ビラの続きで講義でも毎回ビラ（プリント）を配り、受講生にコメントや感想を書いてもらった。延 1 万枚以上のレポートを読んだことになる。このような努力が認められ教育賞をもらえたのは嬉しかった。ところが勢い余って、レポートを電車の網棚に置き忘れ、お叱りを受けることになってしまった。学長室で褒められたり叱られたりで波乱万丈の教員生活だったともいえる。これまで掲げてきた旗「輝く個性とゆるやかな連帯」をもうしばらく振り続け、大学と社会に貢献したいと願っている。学生の元気がなくなりつつあるような気がして心配だ。

仁科 喜久子（留学生センター）



非常勤で東工大の留学生向けの日本語補講を長く担当していた。週 10 コマだったから、常勤の教員よりも貢献していたことになる。この実績があったせいか、25 年前に東工大に迎えてもらった。14 年前に田中穂積先生（主査）の世話で博士号をとった。理工学の専門知識は「門前の小僧」式で身に付けた。くれない工業会（蔵前女性の会）の活動にも参加してきている。これからも世話になった東工大とのつながりを大切に、恩返しをしていきたい。

田中善一郎（価値システム専攻）



（写真：左から，田中先生，玉浦先生，細谷先生）

送別懇談会のみ出席。長く学長特別補佐を務めた。いろいろと提案をしてきたが目に見える変革につなげるのは容易ではないと痛感した。組織や やり方を変える前に意識を変える必要があるようだ。置き土産にと，キャンパスの楽しみ方（散策）を冊子にまとめた。「東工大大岡山キャンパスのフローラ（草本）」と題し，最終頁には西 9 号館からの望岳図も載せてある。仕事の合間に，キャンパスの植物やキャンパスからの眺望を楽しみ，レフレッシュし，いい仕事をしてほしい。冊子は価値システム専攻事務室で入手できる。

柏木孝夫（ソリューション研究機構，機械制御システム専攻）

送別懇談会に途中から参加されていたのに気付かず，お話を伺う機会を逸したのが残念だ。エネルギーの専門家として「スマート革命」の著書もある。社会の未来像とともに大学の未来像を聞いたかった。

（文責：広瀬茂久）